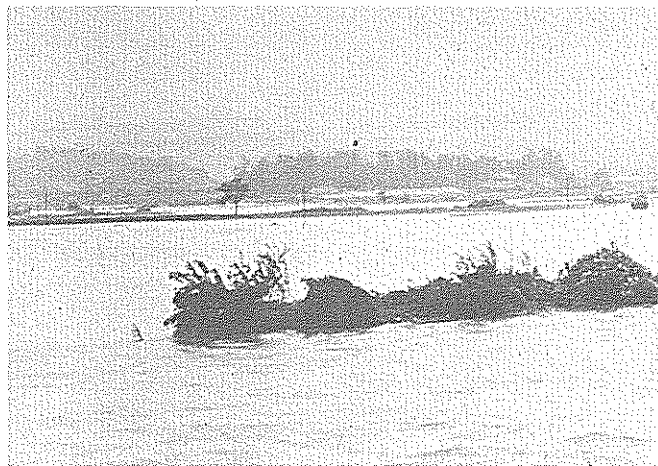


台風・集中豪雨・地震に備えて



昭45・8・21台風10号のつめあと(国分川)

園児や生徒が速やかに避難

6月23日の防災訓練で



▲一列に並んで、みんなで避難(大湊保育所)



▲寝たきり老人を運ぶ消防団員(清風園)

幸いなことに、南国市ではここ数年来災害らしきものが起っていない。台風は常襲地帯で、台風の怖さはだれもが知っています。いざという時には慌てるものですが、災害時の避難場所や道順を確かめておくなど、ふだんから心がけましょう。

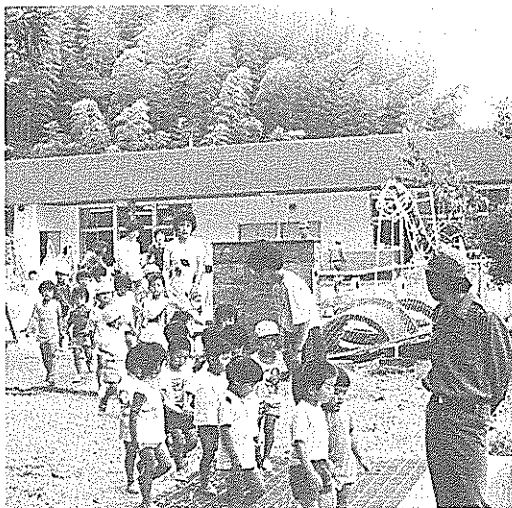
夏の災害シーズンを前に、南国市でも六月二十二日に「防災訓練」が行われました。この訓練は、一般市民のかたが参加できるものではありませんでしたが、各消防団の協力を得て、小学校や保育園、南道学園、清風園で避難訓練が行われました。

災害は起きてほしくないものですが、これらの訓練が「いざという時」には役立つものと期待されます。

家庭で用意するもの

①懐中電灯②トランジスタラジオ③予備電池④当面の食料品⑤水筒⑥応急医薬品⑦かぜ薬、胃腸薬、傷薬、消毒薬、ガーゼなど⑧ビニール袋など。

これらの非常用品は袋などに詰めて、いつでも持ち出せるようにしておくことが大切です。



▲手をつないで避難する園児(岡豊保育所)



▲清風園は避難完了しました

普及所から◎

大豆の栽培について

近年、ほとんど栽培されていなかった大豆も、水田利用再編対策事業に伴い、特定作物に位置づけられ、徐々にタバコ、早期稲作で栽培する農家が増えています。

そこで、大豆栽培についてのポイントをお知らせしますので、参考にして下さい。

○適地・適期：は種で作柄安定を香長平野の場合、七月中旬から八月上旬が、は種の適期。

○排水が良く腐地に富む地壌土、

砂壌土で、乾田が最適。

○は種期が遅れるに従い、は種量を増す(十坪当り五十五ポンド)。

適正な栽培密度、施肥、排水で莢(さや)の確保を

○適正な栽培密度(畝幅一・七メートル、作条四条、条間三〇・四〇センチ、株間一八センチ、一六二・三粒まきとする)、出芽期の排水を良くし、株数の確保をはかる。

○適正な施肥(全量元肥でチッ素一・二ポンド、リン酸五・六ポンド、

カリ五・六ポンドを全層施用)と、降雨時の排水を良くし、着莢率(ちやつきようりつ)の向上を図る。

適正な防除で病害虫の被害防止を

○紫斑病——ベンレート水和剤の乾種子粉衣(薬量は種子重量の〇・五%)

○さび病(生育中期・後期)——ビスダイセン水和剤四〇〇倍

○シラキ病(生育初期・中期)——ジネブ水和剤六〇〇倍

○ハスモンヨトウ(生育初期・中

期、幼虫時期に防除徹底)

○カメムシ類、サヤムシ類(着莢初期・子実肥大中期)——スミチオン乳剤一〇〇〇倍、粉剤三・四ポンド

○バイジツト乳剤一〇〇〇倍、粉剤三・四ポンド

収穫、乾燥、調整の適正化で品質向上

○適期に刈取る。(適期は落葉がみられ、莢が完熟した直後)

○引抜きまたは刈取り後、必要に応じて野干しをし、その後野積みを行う。

○乾燥は、子実の含水率を十四・十五%までとする。

○調整は、ていねいに行い、整粒を良くする。(被害粒、未熟粒、異物等を除く)

なお、は種後三・十日頃の鳥害防止のため、シルバートープを張るなどの措置をする。

収益性は、現況で十坪当りの収量二百ポンドで、粗収益は五万円程度、それに転作奨励金がもらえるが、二百五十ポンドの収量を目標に一層の技術向上が必要だ。